



CITY WATCHING

クローズアップ CLOSE UP

壁に描くかわいい世界

前橋文学館で11月7日、イラストレーターの田村セツコさんがウォールペイントを披露。かわいい文化の先駆けと評されるタッチで木などのイラストを描きました。来場者のリクエストを聞きながら描く場面も。「おちゃめなアリス 田村セツコ展」は12月27日(日)まで開催しています。



市内出土品を臨江閣で

11月10日から23日まで、臨江閣で新出土品展を開催。昨年度、元総社蒼海遺跡群や上細井中西部遺跡群などの発掘調査で出土した遺物を展示しました。展示品の中には出土例の少ない銅鏡や銅製の帯金具も。来場者は一つ一つじっくりと見ていました。



気軽に俳句を楽しんで

10月31日と11月1日に、昌賢学園まえばしホールで市民芸術文化祭俳句作品展を開催。小中学生俳句大会の入選作品など約130点の作品を展示しました。作品展では、訪れた人も五七五の俳句作りと出題の前句に次の句を付ける前句付けに挑戦。俳句に触れ合う体験を楽しみました。

商店街の魅力多くの人へ

「新型コロナウイルス感染症の影響で、まちなかは一時、人がいなくなりました。今も以前のように戻っていません。たくさんの人に帰ってほしいけれど、集まりすぎてもいけない。難しい状況です」
まちなかで創業99周年を迎えた洋品店を営む佐脇さんでも初めて経験する事態だ。しかし、コロナ禍でもまちなかでは店舗やホテルの開業、企業のオフィス移転など新しい動きが続いている。

「商店街の魅力は各店舗に個性があること。それぞれが専門店で、知識が豊富な従業員がいます。ここに新しい動きが加わり、いろいろな人が集まることで一段と楽しいまちなかを感じています」
佐脇さんは今年で15回目となるツナガリズム祭り(本紙2ページに掲載)に、開始当初から中心となって運営に関わってきた。

「地域を元気にしよう」と始まったこのイベント。今年も例年に比べて規模を縮小しますが、商店街の歳末感謝祭と時季を合わせて開催を予定しています。歳末感謝祭との同時開催は今回が初めてなんですよ」
新しいもの、歴史あるもの。それぞれが力を合わせて、まちなかに元気を取り戻そうと試みている。

毎日が新しい出発

何が起こるのか分からないのが人生。つくづくそう思う。私が前橋文学館で「萩原葉子展」をやることになるなんて全く想像しなかった。文学館に誘っていただいたのは、私が30年勤めた美術大学を定年退職する時だった。美術館ではなく文学館というところが私には新鮮だった。それから5年目を迎えてのコロナ禍での葉子展だ。全く何が起こるか皆目見当がつかない。

萩原葉子
河畔奇譚
THE BLUE CAT
Illustration, 68 lyrics
猫 青 菜
vol.20
前橋文学館
027-235-8011



あれは何年前だったか。生前、前橋文学館で開催された葉子展を見に来た事があった。橋の上で母親が踊ったのを見て恥ずかしくなったのを覚えている。その後世田谷文学館でも葉子展があり、そこでもダンスを披露してヒヤヒヤしながら見た。
つまり、私は両館ともダンスしか記憶に残っていないのだ。実は、私は文学館の展示に心動かされるタイプでは無いのである。
だから今、前橋文学館の資料展示を、なんとか面白いと思ってもらえるようアイデアを練っている最中なのである。
萩原葉子展と田村セツコ展の合体は、そんなアイデアの一つだ。セツコさんの生き方のキューティズムと、母親の「出発に年齢はない」と言う決意は、ほとんど同根だと思うのだ。
もちろん、前橋文学館も、愛されるカワイイさを目指して「出発に年齢はない」と思っている。

萩原葉子